

鶴見総合高校「演劇Ⅰ」「演劇Ⅱ」について

神奈川県立鶴見総合高等学校 小嶋 毅

1、学校の概要と科目設定の経緯

神奈川県立鶴見総合高校は2004（平成16）年4月に総合学科のパイオニア校ともいえる県立大師高校、2003（平成15）年度に開校した相模原総合高校に次いで、藤沢総合高校、麻生総合高校、横浜清陵総合高校、金沢総合高校と同時に、県立寛政高校・同平安高校を再編統合する形で開校した。

「産業社会と人間」および「総合的な学習の時間」で構成したキャリア教育の未来探索、通称「みらたん」を柱として、「環境科学」「健康・福祉」「国際文化」「情報・ビジネス」「造形・表現」の5つの系列を設置し、多彩な選択科目を開講している。

また、2008年（平成20）年度からは1・2年次対象の「朝の読書」（毎朝10分）と「90分授業」（1日3コマ）を導入している。「90分授業」の導入は長時間の集中力を生徒に課すこととなったが、「演劇」のような体験型・生徒参加型の授業がしやすくなったともいえる。

「演劇Ⅰ」「演劇Ⅱ」は、5つの系列の中の「造形・表現系列」に置かれ、2～3年次の自由選択科目とされている。（「演劇Ⅱ」は、「演劇Ⅰ」を履修した者のみ選択可。）「演劇」を開講している理由は、俳優・舞台・脚本・演出・照明・音響・道具・衣装・音響等、さまざまな要素が絡み合う総合芸術としての演劇を学び、あわせて劇づくりの過程で個人および集団による創作体験をし、表現力やコミュニケーション力なども養っていくことである。

本校は部活動でも演劇・ダンス・和太鼓等が盛んで、身体的表現をすることが好きな生徒や、将来声優になることを希望している生徒、演劇を通してコミュニケーション力や発声を含めた表現力を伸ばしたい生徒等が受講している。

授業では体ほぐし、呼吸と発声などの基礎訓練から始めて、朗読・既成台本の上演・初歩的な劇作体験などを行っている。本校創立当初、「演劇」「パフォーマンス」の2科目が開講されたが、後に「ヒップホップダンス」の開講に伴い、「パフォーマンス」は閉講した。スポット講師によるダンスなどの体験的学習も5年間継続して行ってきた。

2009年7月刊行の『研究収録 再編から5年の軌跡』によると、「造形・表現系列」の概要は以下の通りである。（演劇・パフォーマンス・身体表現に関わる個所に二重傍線を付した。）

造形表現系列

本校の計画段階において、系列科目の設定に関して既に先行していたいくつかの総合学科高校の例を参考としたであろうことは想像にかたくないが、まったく素地のないところに新たなる分野を系列として立ち上げるには相当な困難がともなったはずである。当時の新校準備委員会諸氏のご尽力の賜物と感謝するしかない次第である。

さてその中のひとつの造形表現系列であるが、他の系列のことはさておき、旧平安高校の中にはある程度の素地があったことも事実である。

というのはひとつめに、旧平安高校の芸術科は美術科目だけでなく工芸科目にも力を注いできたように見えるからである。総合学科創立の前年の時点で、美術室と工芸室を持ち、特に工芸室には三相200ボルトの電源が引き込まれており、電気式の大型陶芸窯や昇降盤（精度の高い円ノコ盤）が設置されていた。その他、定番の糸ノコ盤、ボール盤（ドリル盤）はもちろんのこと、電動ろくろが5、6台、盤、自動送り盤、フライス盤（卓上式だが）まであった。

伝聞によれば、その昔、陶芸の専門家がおられたことがあったようである。一般に専門家がいなくなると、その担当科目は立ち枯れていくものであるが、これを引き継いで継承された方のご努力で、統合再編前年にいたるまで陶芸という科目が連綿と受け継がれていた。また、この方は木工にも造詣が深く、先述の昇降盤は彼が導入したとのことである。ふたつめには演劇部の活動が、代々の指導者に人を得て盛んであったことである。また音楽科でも新校開校に照準を合わせて新しい科目を系列用に準備していた。このような素地があったので、陶芸、木工、演劇、ボーカル&アンサンブル、CGをラインナップとした造形表現系列が準備されたようである。一時はガラス工芸にも手を広げようかという話もあったようであるが、立ち消えになったようである。ほとんど造形表現系列のためにだけ建設したような新棟、大型ガス陶芸窯、各種CG機器、ハイレベルな照明設備等々での高額出費のあおりだったのかも知れないが詳細は分からない。その後、開校3年目にはヒップホップダンスと染織が、4年目には絵画が開講して現在にいたり、特にヒップホップダンスは人気科目となっている。

（『研究収録 再編から5年の軌跡』、2009年7月本校刊 より）

2、授業の概要

- (1) 授業時間＝週 1 コマ 90 分で「演劇Ⅰ」と「Ⅱ」を同時展開。
(月曜日午後 3 限目の授業 (14 時 10 分～15 時 40 分))
- (2) 生徒数＝今年度は「演劇Ⅰ」15 名 (内男子 2 名)、「演劇Ⅱ」6 名 (全員女子) の合計 21 名。
(昨年度は「演劇Ⅰ」10 名「演劇Ⅱ」7 名の計 17 名、一昨年「演劇Ⅰ」8 名、「演劇Ⅱ」1 名の計 9 名)
- (3) 授業担当＝非常勤講師 (演劇の専門家) と常勤教諭 (国語科) の 2 名で T T 形式。
- (4) 授業内容：大枠は別紙シラバスを参照いただきたい。
今年度前期の授業計画は以下の通りである。

2010 年度前期 「演劇Ⅰ」「演劇Ⅱ」授業計画

【1 回目】

4 月 12 日 (月) 50 分授業。

オリエンテーション。全体的な授業の内容と注意点等を連絡。

軽いゲームや他己紹介等で終了。自己紹介用に生徒にアンケートを取る。

【2 回目】

4 月 19 日 (月) 平常授業

毎回授業開始に行っている、演劇の入り口的な説明等。

アップ (「わたし、あなた」等)、発声、簡単な戯曲を使った授業。

平田オリザの台本の抜粋 (2、3 ページのテキスト) まずは、生徒が等身大の身体でセリフを言う事に触れてもらう。その後、セリフで相手役とコミュニケーションをとるということ＝演劇ということを実感してもらう。最後に発表で終了。

【3 回目】

4 月 26 日 (月) 平常授業

アップ (ストレッチ)、ゲーム (フルーツバスケット、ウィンクキラー、スパイあてゲーム他)、即興演習 (生徒的にも楽しんでやれる要素のある分野) 即興のノウ

ハウやポイントを伝える。演劇部で使用している台本『L I V E』（朝日悠作）を使っての演習。

【4回目】

5月10日（月）平常授業

アップ（スパイゲーム、聖徳太子ゲーム）、発声。

古典劇、翻訳劇、現代劇の演習。オイディプス王、夏の世の夢、竹取物語、現代の作家の誰かの数点の台本の抜粋を持ちより、いろんな戯曲に触れてもらう、またその時代背景と戯曲の関係性なども伝える。また、演技の取り組みに着いて触れる。なりきる演技とそうでない演技についての解説。

（演技の種類について）、その後、チーム分け。それぞれのチームにどれかのテキストを練習してもらって、最終的に発表を行う。

【5回目】

5月17日（月）平常授業

アップ、発声。

シーン作り、集団創作。

何か、簡単そうな台本の数ページを渡し、その渡した分のシーンを立ち上げることと、その後の展開を自分達で考え、オチをつけて創作する。集団での取り組み＝演劇という特性を実感してもらう。

渡された台本に書いてあること以外にも何かを見出し（想像して）てみる。田上パール（※）「師走やぶれかぶれ」の抜粋他。

【6回目】

5月24日（月）平常授業

アップ、ゲーム、田上パール他の台本を使ってシーン作り。

【7回目】

5月31日（月）平常授業

アップ、発声。

スタッフ演習。

テクニカルな分野の照明、音響の説明。

その効果とどういった装置なのかを説明。

「劇団新感線」などのDVDを少し見せ、どのように演劇が照明、音響を使用しているかを鑑賞する。

演じる側と、機材を操作する側を体験してもらう。

中間試験（台本を考え、照明、音響を駆使したオリジナルな芝居創作）に向けた創作開始1

場所・問題・背景を全員に書き出させ、その中から、面白そうなシチュエーション4つ選ばせ、それぞれの4つのどれかの小作品を作らせる。

劇構造の説明、創作の流れを伝える。

【8回目】

6月14日（月）平常授業

アップ、発声。

中間試験用の創作2、先週の続き、この回までに台本を上げさせる。

その後、立ち稽古、照明、音響のテクニカルの打ち合わせ。

【9回目】

6月21日（月）平常授業（三者面談週間）

アップ、発声。

創作3。

前半、創作の続き、全体的な仕上げ。後半、発表。講評、生徒による感想や評価。

この二週間後に行う「朗読の発表」の告知。題材選びを促す。

題材は、こちらで選ぶか、生徒に選ばせる。（歌詞や漫画は、ナシ）

【10回目】

6月28日（月）平常授業

アップ、発声。朗読の発表の作品の提出。

次週の朗読の発表に際し、全員の朗読を一度、見て、それぞれの問題点や工夫すべきポイントを明確にさせる。その後、鑑賞力演習。

3つの演劇のDVDを5～10分ずつ鑑賞させ、それぞれの作品の相違点、特徴、作品としての感想などをこちらで用意した用紙に記入させる試験タイプの時間。

その後、その解答用紙の公開、コメントする。

感じる事がそれぞれ違うと言う事を実感してもらい、感じた事をそのまま言葉にすることの重要性を知ってもらう。

【11回目】7月5日（月）平常授業

朗読演習。発表。

一人一人で行う、度胸試しの朗読。

前回、言われたことをどこまでクリア出来ているかで、評価、講評。

生徒にもそれぞれの朗読を評価させる。

【12回目】

7月12日（月）平常授業

劇作演習。台本を書く事に触れてもらう。

簡単なシナリオの書き方を講義し、簡単に触りの部分だけを書いてもらう。

その後、集計、講評。

夏休み前の授業の感想や意見等をアンケートに取る。

【13回目】

8月30日（月）平常授業

アップ、発声。演出演習。演出という作業について、考える。演出という作業を全員が体験する。

【14回目】

9月6日（月）平常授業

出来れば、ゲスト授業？

【15回目】

9月中（40分）

前期最後の授業なので、授業に対する前期の振り返りを行う。アンケートを取る。

※非常勤講師の田上豊氏が主宰する劇団「田上パル」について

2006年2月旗揚げ。

熊本県出身で主宰の、作・演出をつとめる田上豊（たのうえゆたか）が、桜美林大学在学中に全編熊本弁熱血劇『報われません、勝つまでは』を上演するために結成した劇団。同作品は、第14回北九州演劇祭コンペティション部門に選拔され、多方面から注目を浴びる。また2008年度より富士見市民文化会館キラリ☆ふじみのレジデントカンパニーとなる。

「見たら元気の出る芝居」をモットーに、安全第一で演劇創作を行う。セリフに熊本弁を多用し、疾風怒濤のスピード感と遊び心満載な演技性をもって、危機的状況を特殊に切り抜けていく人間達の有り様を一貫して描く。

『報われません、勝つまでは』『師走やぶれかぶれ』『アルカトラズ合宿』にて高校生体育会系シリーズ三部作を完結。座組の平均年齢は18歳を既に越えているが、18歳のような純粋な心はそのままに、未知なる作品性の広がり求めて、作品作りを継続している。演劇以外に、イベント等にも時折参加し、アウトリー

チ活動にも積極的に取り組んでいる。

3、課題

- (1) 「演劇Ⅰ」に対して「演劇Ⅱ」は演出・照明・音響等のスタッフ的要素を学習することなどを加えて展開しているが、「演劇Ⅰ」と重なる部分が多く、展開の仕方がこれでよいのか、検討を要する。(TTの長所を生かして、「演劇Ⅰ」「Ⅱ」別個の内容をどのように指導していったらいいのかを整理する必要がある。)
- (2) TTにおいて、一般教員の役割は何で、専門家の役割は何なのか、明確化も必要である。
- (3) 専門家でない一般教員が指導力を身につけるにはどうしたらいいのか。研修機会をどう確保するのか。また、その費用はどうするのか。
(財団法人・高校教育会館主催の「教職員のための夏期研修講座」ワークショップ「表現教育」＝講師：文学座・望月純吉さん他＝を2008・2009年度に受講したが、実践的かつ理論的で、非常に役立った。)
- (4) ゲスト授業は生徒たちにとって新鮮で刺激的でもあり、有効性が感じられたが、費用面の裏付けがなく、手続きにもやや面倒なところがある。必要が生じたときにゲストを招き、費用面を裏付ける制度を整えられないものか。
【参考】
 - ・2008年度・2009年度は県教委のアーティスト派遣事業を利用。
2008年度はダンサーの手塚夏子さんに2回、2009年度は劇団扉座(女優・田島幸さん、田中信也さん)に3回の授業を行っていただいた。
 - ・その他、2008年度前期に一回、2009年度後期に一回、女優で朗読ワークショップ「まりこ☆みゅーじあむ」主宰の川井真理子さんを招いての授業も行った他、田上パルの劇団員を招いて演劇実演を鑑賞したのち、同じ台本を使った演技の指導も行った。
- (5) 2010年度に「国際・文化系列」の科目として新たに「アナウンサー入門」が加わった。この科目と「演劇」の関係は何か。